

「私」と「仏」の間には

松田 妙子

この夏、私の周囲の人々（テレビのニュースキャスターも含めて）は、暑いことには大いに難渋しているが、雨が降らないことに対しては、さほど悩んではないようでした。農業を営んでいるわけでもない、都市生活者にはそれが「普通」なのかもしれない。なのになぜ私はこんなに苦しいのか。庭木に水をやるのに、上水道を使うような人より、余程水を大切にしているつもりなのに、そういう人ではなくなぜこの私が？私の苦しみは、雨が降らない限り解消されない。天候という、人間の力ではどうにもならないことに、どうしようもなく苦しんでいる状態。こんな時信仰があれば少しは強くなれるのか、と思いましたが、私の目の届く範囲には、参考になるようなことは書かれていません。戦争とか貧困とか差別とか、人間同士の愛憎とか、要するに人間世界のことばかりで、お天気に苦しむ人のことなんて、どこにも書いてないのです。

光円寺報を聞いても、私には「？」の羅列でした。問題には、目的があって起こっているって？「問題とは本来の自分が目覚めて行くために与えられた何かの願いである」って？それが仏の願いなのか、「本来の自分」の願いなのか知らないけど、何で日照りが「願い」なんだ？成程人間は、欲得ずくで誤ちを繰り返す愚かな動物だろうが、立ち枯れてゆく植物に何の罪があるのだ？この夏は特に、天が雨を降らす場所を限定しているような気象だったときくが、選ばれなかった所のもろたちは、渴いて枯れてゆくしかないのか？何でこれが「願い」なんだ！？何の目的があるというのだ、



なぜこれが「大悲」なんだ・・・！！

ところが、どんなに願っても祈っても焦がれても、決して降らなかったはずの雨が、約2カ月半ぶりに降りました。しかも9時間も、しとしとと降り続いたのです。あまりに幸せすぎて、茫然としたまま、また眠れなくなりました。天から水滴の落ちてくるのが、かくも奇跡的に「有り難い」ことであったとは！嬉しくて嬉しくて、1人で1杯歌を歌いました。

それでふと思いつきました。中島みゆきの初期の歌に、「この世を見据えて、笑うほど冷たい悟りもまだ持てずこの世を望んで走るほど心の荷物は軽くない」という歌詞があります。かつては私も、悟りとはそういうものだと思っていました。でも今は「違うんじゃない？」と思います。悲しみや苦しみや怒りを感じなくなることが悟りではない。少なくとも私には、そんな「悟り」は一生訪れないだろう。これからも大いに怒り、苦しみ、悲しみ身悶えしつつ、一方ではニヤついたり歌ったり舞い上がったたりしながら生きていくだろう、と。

「17才の時が人生で一番辛かった。震度7の地震で神戸の街が崩壊した時でさえ、私が17才の時ほどには辛くなかった」と、私はよく人に言います。でもそれはとんでもない傲慢だったのではないかと、ふと思いつきました。古い私のカルテには「青春期危機」と書いてありました。私はその「青春期危機」の苦しみ故に、外界の刺激に心を閉ざし、殻に閉じこもっていただけ。あらゆることに感受性を全開にしているのは、到底生きていけないので、人は忘れたり、感じないようにしたりして身を守ります。今の私はそのバリヤが

一部薄くなっているので、天候に過敏なのです。今の私が震度7の地震に遭遇したら、ひとたまりもありません。地球が一瞬身震いするだけで崩壊するほど、人間の生活は脆いものです。それが当たり前だったのです。阪神・淡路大震災の時には、自分のさなぎの中で、病氣と闘うのに必死だった私が、今はさなぎを脱け出て、天候という自然現象にのたうち回っている。当たり前のことを、当り前と気づくために。とすればやはりこれは「願い」なのかもしれない。煩惱を捨てるのではなく、担うとはこういうことなのかもしれない。

近所にさる新興宗教の支部ができて、「こうすれば幸福になれる、苦しみから逃れられる」と宣伝しまくっています。成程、「敵」や「幸福」をここまで具体的に名指しすれば、わかりやすいのは確かだろうけど、私の価値観とは相入れません。浄土真宗の教えは、私にはとてもわかりにくく感じられます。世間一般の価値観からすると、逆説的にも思えます。でも私は魅かれます。

フランス語で、同じ「ラ・メール」と発音する「母」という言葉の綴りの中に、「海」という綴りが含まれていて、私たちの文字では「海」の中に「母」がある、といった詩を昔読みました。「仏」という字は「私」という字に似ているな、と思ったら、何のことはない「私」の中に「仏」があるのです。でも3本の線が邪魔をして、「私」は「仏」になれない。その3本の線とは何だろう、と考えて見る時間が、私は嫌いじゃないです。

2010.9.30. 7:30PM*

セブンジェネレーションウォーク交流会 in 姫路

祝島からCOP10(生物多様性条約10回目の締約国会議。2010年10月、名古屋で開催)の開催される名古屋まで、歩いている山田俊尚さんたち7人であった。7代先のこともたちのことを思っ生きてきたネイティブアメリカンの生き方を題したセブン・ゼネレーションウォークHPもある。

山田さんは天台宗の寺を出た。仏教の真髓に近づけば近づくほど弾圧を受けるのはいつの世も同じのようだ。法難にあつたところこそ仏法興隆という。「法難がないということは真宗が衰退しているということなのです。そういうことを内からの法難と言つたのです。」

という竹中智秀さんの文章に、ちよつと出遇っていた。本当にそつだと思つた。一日30分あるいている人たちはすがすがしいなあ! 自分がいかによんでいるかがわかる。繋がつていきたい。

10月に国連地球生きもの会議(COP10)が開かれる名古屋市に向かって、7世代先の未来を考え、持続可能な自然のサイクルの大切さを訴えながら山口県上関町から歩いている7人が20日、姫路市に着いた。同日午後、同市内で、地元の人たちと交流し、旅の目的やお互いの活動を紹介し合った。(宮沢賢一)

「自然と共に」訴え行脚

「セブン ジェネレーションズ ウォーク」という活動で、代表は東京都在住の住職、山田俊尚さん37。「7世代先の子どもたちを考えよう」というアメリカ先住民の教えに影響を受けて歩くことを思いつき、今回で3回目だ。電気やガスなどエネルギーに頼らない徒歩という手段で1日20〜30分を移動し、各地で持続可能な自然のサイクルの良さを広めている。

8月25日、原子力発電所建設の反対運動が起こっている山口県上関町の祝島を出発した。20日午後、姫路市に着いた19〜39歳の男女7人は、同市本町のデザイン事務所「納屋工

徒歩の一行 姫路で交流

房を訪れ、独自の地域通貨を使って持続可能な社会の良さを広める「ピースチー(ピースチー)はりま」のメンバーと交流会を開いた。山田さんは「活動から自然な生活を確立してもらうきっかけになれば。そしてここで聞いた話を、また次の場所でも話したい」と話した。ピースチー(ピースチー)はりまの山下巨鶴さん(51)は「同じような思いを持った人がいるのを実感でき、自分たちができることを見つめ直す機会にもなった」と話した。

「7世代先の未来を」



「セブン ジェネレーションズ ウォーク」について話す山田俊尚さん(右から2番目)＝姫路市本町